

公的な接種体制の拡大

ワクチンの安定供給

国や自治体に **声** を上げよう

など



5月19日開始
6月12日現在
1114件

1回目	884件
2回目	230件

耳原風クリニック
コロナワクチン接種状況
本会土の午後で接種しています

**はじめて
受け入れられない”選択**

大阪の新型コロナウイルス感染者は、4月上旬から急増し、中旬には連日1000人を超え、若い年代でも重症化し人工呼吸器やECMOが必要になる人が増加。それに伴い、重症用病床使用率が100%を超え、重症対応病院への転院が困難となり、軽症中等症ベッドも空かず、入院困難な状況となりました。自宅療養中に病状が悪化しても救急車の搬送先が決まらず、長時間待機を強いられるという事態となり、「医療崩壊」と報道されました。

耳原総合病院でも「断らないER（救命救急）」を掲げてからはじめて、「受け入れられない」という選択を経験しました。

患者を減らす 協力を市民へ

大阪府は、「軽快すれば、早期の自宅療養への移行」を指示し、危機対応は医療機関任せでした。職員を

**自分たちに
できることをやる**

病棟では、急変する患者を目の当たりにし、この病気の怖さを実感して動揺することもありましたが、これまで培ったスキルを自信に変えて、「自分たちにできることをやる」と団結し、必要なことを検討。タブレット面会や手紙を届けるなど、患者さん、家族が互いに様子がわかり、安心していただけるようにしました。

診療所では、自宅療養中の方の悪化の兆候を見逃さず、早期対応でき

守り、使命を果たすために、模索しながら新型コロナウイルス感染症と向き合ってきました。

要請に応えるため病床を増やし、体制確保のため、全職員に向けて「職員同士や同居人以外の会食や行動は禁止」とする行動制限を通過し、緊急事態宣言発出直前には、総合診療科部長の大矢亮副院長が、SNSを通じて「一人ひとりにできることがある。会食やカラオケなど、感染を広げる行動を控えましょう」と、患者を減らすための協力を市民のみなさんへよびかけました。



るように陽性者への電話連絡をはじめ、臨時往診の体制も検討しました。介護分野にも影響がありました。面会の機会が減り、自宅で終末期を過ごされる方が増えました。苦痛が緩和されるように、少しでも安心していただけるように、24時間体制で支援しています。

訪問時に、看護師やヘルパーがウイルスを媒介しないように、防護員の着脱訓練も行い、友の会のみなさんからのエプロンが、とても役立ちました。

健康友の会みみはらでは、活動の自粛を余儀なくされましたが、長引



また、ワクチンの安定供給や公的な接種体制の拡大など、国や自治体に求める声を上げていきます。

**一人でも多く
早期に接種を**

5月から、65歳以上の高齢者に対してワクチン接種が始まっています。同仁会の事業所では、総合病院は職員をはじめ、地域の医療従事者などへ、診療所はかかりつけ患者さんや訪問診療患者さん、施設からの依頼に応じて、入所の方へ接種を行っています。みみはら在宅クリニックは、在宅療養中の患者さんのご家族への接種も行っています。

堺市のスケジュールでは、7月末までに高齢者の接種を完了し、続いて64歳以下を開始するとされていますが、予約が取れない方の不安の声が毎日のように届いています。一人でも多く、早期に接種できるように各事業所が協力しています。

今年4月には、新入職員の「友の会体験」ができず、少しでも「友の会」を身近に感じてもらうと、「ともの家」と研修会場をリモートで繋ぎ、全支部から新入職員へのメッセージを作ってもらったなど、工夫しました。

今年4月には、新入職員の「友の会体験」ができず、少しでも「友の会」を身近に感じてもらうと、「ともの家」と研修会場をリモートで繋ぎ、全支部から新入職員へのメッセージを作ってもらったなど、工夫しました。

く自粛生活で孤立化する会員をなくそうと、「お元気ですか対話・訪問」に取り組み、昨年一年間でのべ1万9966人と対話することができました。今年度も6月末からスタートしています。

また、感染防護具不足時には、「手作りエプロン・マスクづくり」にも取り組み、のべ600人以上の会員が5万4000枚以上を作成して、現場に届けました。さらに取り組みのなかで、泉南市にも担い手が誕生するなど、組織的な前進も生み出しました。